

理学博士 牧野富太郎 創始 主幹 薬学博士 朝比奈泰彦

植物研究雑誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第30卷 第6号 (通巻第329号) 昭和30年6月発行

Vol. 30 No. 6 June 1955

原 寛*・森 邦彦**：羽後に産するシオギクの近似品

Hiroshi HARA* & Kunihiko MORI** : An interesting *Chrysanthemum* growing in Prov. Ugo, North Honshu

昭和26年10月11日筆者の一人(森)はイタビカズラの自生を求めて山形県飽海郡吹浦村字女鹿と秋田県由利郡上浜村字小砂川の一帯を終日歩き廻った。帰途小砂川の床屋へ入つて鬚を剃つた際そこの主人が蟹の採集品などをみせ、話はいつか植物にうつり裏の浜の斜面に菊が自生しているから見ないかというので海岸にててみた。なるほど小面積に自生しているので早速枝をとつて東大(原)へ送つたが、まだ花もなかつたのでハナイソギクに近いが多分栽培品が逃げ出したものだろうということでそのままになつていた。昨秋森は更に2回同地を訪れ開花期に観察することができたのでここに報告することにした。

生育地は小砂川大字中磯で駅から約15分位の行程である。海岸に面した43°位の急斜面で砂土、N 60°W、幅は30m、汀から5-10mの所から斜高25m位で平坦になる斜面上の小面積である。この斜面にはウシノケグサ、スナビキソウ、オニヤブソテツ、ハマゼリ、アキカラマツ、カミエビ、キリンソウ、カワラナデシコ、ハマヒルガオ、ノビル、ススキ、ササの一種などが生育していて菊はこの間に群生している(挿図参照)。

この菊は下面に白綿毛を密布した厚い葉と発達の悪い舌状花をもつてることからすぐイソギクやシオギクの仲間であることが分る。しかしこの類は銚子以南の太平洋岸にのみ自生するものと考えられているし、形態的にも何れとも少し異なる点があるので一先ずウゴシオギクと名付けることにする。

ウゴシオギクは関東海岸に自生するイソギクと比べて、葉がはるかに幅広く羽状に分裂しているのですぐ識別でき、又総苞は幾分大きく、常に淡黄色の短い舌状花をもつてゐる。又四国海岸に自生しているシオギクと比べると、葉は更に幅広く径3-4cm、裂片

* 東京大学理学部植物学教室。 Botanical Institute, Faculty of Science, University of Tokyo.

** 山形大学農学部。 Faculty of Agriculture, Yamagata University, Tsuruoka.

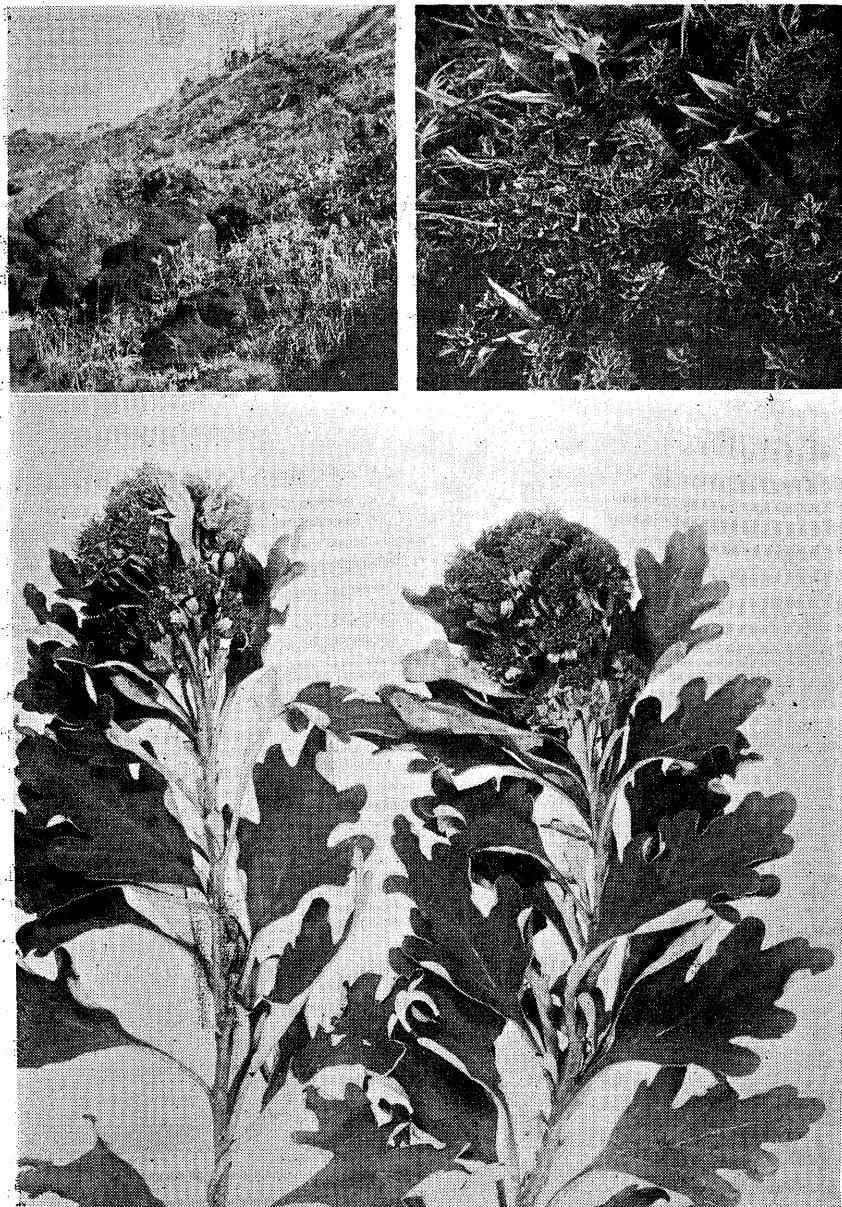
は深くさけ円頭、総苞はやや小さく、総苞外片は広く、花序は密でややイソギクの方に似ている。

近年は極めて稀になつたが古くはイソギクやシオギク或はそれらと家菊との間の雑種がよく栽培されていた様で、牧野博士は植雑 26 : 398-399 (1912) で色々な形を図示して居られる。しかしウゴシオギクはそのどれとも一致せず、葉は常に幅広く、舌状花は小形で長さ 3-5 mm、淡黃色で薄質である。通常ハナイソギクと呼ばれているもの大部分はイソギクの一形ではなく、イソギクと家菊の雑種である。この雑種にはその両親の中間の色々な性質を示す個体があつて、あるものはイソギクに近く他のものは家菊に近い。葉形だけではウゴシオギクとほぼ一致する形もある。*Pyrethrum Decaisneanum* Maxim. はその基になつた標本をパリー博物館で木村陽二郎博士に見て載いたが、北村博士の見解の如くこれもやはり家菊とイソギクの雑種で家菊の方に近寄つた一形と考えてよい様である。

ウゴシオギクの染色体は永海秋三氏を頼りし、oxyquinaline-orcein 法で調べて載いた結果 $2n=72$ であつた。これはシオギク ($2n=72$) と一致し、イソギク ($2n=90$) とは異つてゐる。又ウゴシオギクは個体による変異が少なくほとんど一定した形質を示しているし、花粉はよく粒がそろつて居て正常な点からみても、上記のハナイソギクの様な家菊との雑種性のものとは考えられない。

ウゴシオギクが眞の自生であるかどうかは疑問であるが、現在は自生状態であつて附近の人々にも栽培されていないので栽培品から逸出したと速断もできない。村松七郎氏の秋田県植物誌 125 (1932) にはイソギクが載つてゐるがこれも恐らくウゴシオギクを指すのであろう。更に興味深いことは本草図譜湿草部 11 卷 10 丁裏 (1828) に図解されている「九牛草 えもかつぎ」で、説明中に「羽州米沢にてきらくさと云」とあり、その図もウゴシオギクによく似てゐる。この事は当時この菊が出羽地方で栽培されていてそれが海岸に逸出して現在まで残つたともみられるし、又逆に羽後海岸に自生していたものを当時の好事家が米沢地方へもつてきて栽培していたともみられる。何れにしてもウゴシオギクが相当古くからあつた事が推察できると思う。

この様にウゴシオギクの起源系統については今後もつと詳しく原産地において又細胞遺伝学的に研究されてからでないと決定できないが、今迄に記載されたどの形ともずれたものである。しかもその產地はこの類が今迄知られていた我国中南部の太平洋岸暖地から遠く離れた北方でしかも日本海岸であることは非常に面白い。もしこれが眞の自生であるならばこの類全体の起源について考察する際の重要な資料になる。栽培起源のものとしても、栽培品がほとんど姿を消してしまつた今日までこの様に遠く離れた北地に自生状態で多年生育しつづけている事は興味深い。又葉の形などか殆ど一致するハナイソギクの一形とは系統を異にし、雑種ではないと考える。結局シオギクに最も近縁であるが上述の様に多少の差異がある。ウゴシオギクはかなり一定した特徴をもつてゐる



Chrysanthemum Shiogiku Kitamura var. *ugoense* Hara et K. Mori

が、四国のシオギクには葉、総苞片、花序の形にかなりの変異がみられることも考慮して、ここにシオギクの新変種として次の様に記載することにした。

Chrysanthemum Shiogiku Kitamura

var. *ugoense* Hara et K. Mori, var. nov.—*Chr. ugoense* Hara et K. Mori, in sched.

Caulis ascendens simplex vel basi ramosus ad 60 cm longus superne albo-lanatus dense foliatus. Folia ambitu obovata (3.5) 4–4.5 (5.5) cm longa (2.5) 3–4 cm lata ad medium utrinque 2–3-pinnatiloba basi in petiolum 1–2 cm longum late cuneata, lobis vulgo oblongis apice rotundatis integris interdum obtuse pauci-serratis, textu crassa supra intense viridia albo-marginata infra albo-lanata. Inflorescentia dense coryniflora ca. 12–22-florifer. Involucra campanulata in vivo 5–8 mm in diametro 6–7 mm longa, squamis subtriseriales exterioribus ovatis vel ovato-oblongis interioribus ellipticis vel oblongis apice rotundatis margine late fusco-brunneo-scariosis. Flores in mense Novembri. Flores radii ♀, ligulis parvis 3–5 mm longis (usque ad 6×2 mm) tenuibus dilute flavis apice 2–3-fidis interdum ad medium irregulariter fissis. Flores disci hermafroditici; corollae 3.5–4 mm longae superne luteae 5-fidae. Receptaculum ovoideum. Numerus chromosomae $2n=72$.

Hab. Honshu. Prov. Ugo: in declivite littoris Kosunagawa (K. Mori, Nov. 20 & 29, 1954; Dec. 3, 1954—Typus in Herb. TI).

This variety differs from the type in having broader deeply lobed leaves with round-tipped lobes, slightly smaller involucres with broader outer scales, dense inflorescences, and always small thin yellowish rays. It is now growing in a wild state on coastal slopes, but its origin is still doubtful. *Chr. Shiogiku* has been known only from the southern coast of Shikoku.

終にウゴシオギクの染色体を調べて下さつた横浜国立大学の永海秋三氏に厚く御礼を申し上げる。又パリーに居られ *Pyrethrum Decaisneanum* Maxim. のタイプを見て下さつた木村陽二郎博士、ハナイソギクについて色々資料を下さつた久内清孝、畠山泰一両氏に深く感謝する。

□本田正次：日本種子植物分類大綱 恒星社厚生閣、昭和30年1月発行 240頁 580円。
前著大綱日本植物分類学の改訂版にあたるもの。

向坂道治氏担当の羊齒植物までを切りはなし、種子植物中の日本に原産しないものを除いて、新らしい分類系のもとに科属を排列した。目や科の細分が目立つ。これは最近の傾向である。挿図は旧著踏襲、若干の追加（たとえばタヌキノショクダイ）あり。Engler 体系の修正案として大いに参考になる。(F. M.)